



正常と異常の中間領域 : 一九世紀ドイツ・フランス・ベルギーにおける精神病質概念と人格概念 (特集 福祉国家・教育・統治 : 一九世紀フランス社会研究)

渡邊, 拓也

(Citation)

社会学雑誌, 39:95-113

(Issue Date)

2022-11-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482579>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482579>



正常と異常の中間領域

—— 一九世紀ドイツ・フランス・ベルギーにおける精神病質概念と人格概念 ——

渡 邊 拓 也

大谷大学社会学部教授

本稿の目的は、西欧における正常な精神と異常な精神の中間領域の形成過程について、一九世紀ドイツ、フランス、ベルギーでの精神医学言説の変遷に着目しながら明らかにすることにある。特に鍵となるのは「人格」の病理（二重人格など）が論じられるようになる一八八〇年代以降であり、本稿では、モレルの変質論の影響を受けた精神病質概念がクレペリンによって鑄直され、正常と異常の中間地帯に「精神病質人格」として措定されていく流れを主な分析対象とする。こうして異常人格は、疾患ではないが病的であるとされ、診断名と共に有徴性のレッテルを付与された。それはまた近代市民社会が「危険度が高い」存在に対する不寛容の度合いを強めていったことの証左でもあった。

一 問題意識

本論考で取り扱うのは、主に一九世紀末期の西欧における、正常な精神と異常な精神との「あいだ」をめぐる精神医学言説の変化についてである。大まかに認識枠組みの推移を示すならば、一八世紀の意識と啓蒙の哲学においては、両者は単に、そこに理性が存在するか不在かの二分法をもって区分されていた。しかし一九世紀に入ると、精神医

たちはすぐにそうした古い認識法の限界に気がついた。「正常と狂気の中間領域」の発見は、精神医学全体に混乱を惹起したが、とりわけこのグレーゾーンの扱い、つまりそれを精神疾患の病名および診断名に登記してよいかどうかの判断については、近代精神医学の黎明期から現代のマニユアル的診断（DSM）全盛期に至るまで、長く慎重な議論が続けられてきたと言える。

例えば、二〇世紀初頭のドイツで成立する精神病質人格

Psychopathische Persönlichkeit という奇妙な概念について、エミール・クレペリンは次のように位置づけている。「病的素因から発する精神病の型のうち、明白な病的状態と、まだ健全さの範囲に入る風変りな人格の間の、広い中間領域にあるもの」¹⁾。すなわちそれは、あくまで「人格の極端な偏り」であって精神疾患ではないものとして定式化されたのだが、ここからは精神病質人格の概念が、精神疾患と正常な精神とのあいだを取り扱うために準備された様子が垣間見られるだろう。

本論考の関心は、こうした正常と狂気の中間領域の設定をめぐる言説の変遷に置かれている。中でも着目したいのは、特にフランスにおいて一八八〇年代以降に本格的に議論されるようになった「人格」の概念である。本稿ではエレンベルガー (1970)、ダルモン (1989)、スカル (2015) といった、精神医学史を扱った先人たちの豊かな記述を傍証としつつ、とりわけハインロート、リポー、ダルマーニューらの著述を取り上げ、一九世紀フランス精神医学 (モレル、マニヤンの変質概念) が二〇世紀ドイツ精神医学 (クレペリン以降の精神病質人格概念) へと接続されていた際に、この人格概念が重要な役割を果たしていく様子の描出を試みたい。

二 精神病質前史：カントとハインロート

まず遠景の描写から始めよう。古代における狂気は、第三者から見ても非常にわかりやすい様相を呈する。旧約聖書に記された初代イスラエル王サウル、バビロニア王ネブカドネツアルは、いずれも神に逆らった罪により呪いを受け正気を失った。前者は「恐怖、憤怒、殺人欲、抑鬱に終始囚われ」、後者は「牛のごとくに草を食ひてその身は天よりくだる露に濡れ、終にその髪の毛は鷲の羽根のごとくなり、その爪は鳥の爪のごとくになりぬ」という。そこでは狂気の典型的な目印は、意味不明なことを話し、ヒトのようではなくなり、また我を失って暴れ出すといった、甚だしい異常行動の派手な顕現だった。古代においてそれらは概して、というよりはほぼ例外なく、悪霊 (ないしそれに類するもの) の体内への侵入によって説明されていた。つまり正常と異常との分水嶺は、端的に侵入者の在不在だった。

エーゲ海に浮かぶコス島にヒポクラテスが出るのは紀元前五世紀頃と伝えられる。この頃より発展する古代ギリシャ医学では、血液・胆汁・黒胆汁・粘液の四体液説に則って、精神疾患を含む疾病の原因を、体液バランスの崩れという身体因、およびそれに影響を与えうる (食物や外部からの刺激といった) 環境因へと求めていた。メランコリア

の語源が、黒胆汁だったことは有名な逸話である。⁽³⁾

四体液の均衡とその崩れが人の健康状態を左右するとう、このヒポクラテス学派の考えは——フイクシヨンであつたにも拘わらず——その後二千年以上の長きにわたり西欧医学に影響力を持ち続けることになる。こうした状況によく変化の兆しが訪れるのは、一七世紀にデカルトの機械論的思想が提示され、脳・神経系の解剖が進められて以降のことだった。社会学者アンドルー・スカルは一八世紀イギリスでジョージ・チェイニーがなした仕事のインパクトを強調している。

まず何よりも大事なものは、ヴェイバーズであれスプリーンであれ、はたまたヒステリアであれヒポコンドリアであれ、チェイニーがこれらを想像病などではなく紛れもない現実の病気だと主張したことである。しかも彼はその原因を、当時最先端の医学者たちがヒポクラテス派やガレノスの体液医学に代わる人体の新たな生命原理と目し始めていた器官、すなわち神経に求めた。⁽⁴⁾

チェイニーはスコットランド出身の食餌療法を専門とする医師だった。彼は「イングリランド病」English maladyという造語を一七三三年に生み出しつつ、メランコリアやヒ

ステリアといった比較的軽度の精神疾患を、身体に根柢を持つ「神経」の病へと読み替えていった。中世末期から近世にかけての西欧で、メランコリアに対する一般的解釈が「想像力の病」すなわち「病は気から」であつたことを考慮に入れると、チェイニーの主張はやはり画期的なものだったと言える。近代以降の精神疾患をめぐるあの根深い問題、すなわち身体主義的・唯物論的アプローチと心理主義的・唯心論的アプローチのあいだの主導権争いは、何もこの時開始された訳ではないとはいえ、デカルトの物心二元論を足がかりにしながら、一八世紀にはすではつきりとした対立図式を形成しつつあつた。

ただし、狂気というステイグマをめぐる典型的イメージは、スカルが指摘するように、依然として「躁鬱いづれの方向であれ、情動の制御を失つた者、通常の常識的現実と精神世界を共有せず、幻覚と妄想に囚われた者、共同体内で受ける制裁的処遇をまったく意に介さず、文化的な決まり事から大幅に逸脱して周囲の予期せぬ振る舞いに及ぶ者、欲望の抑制がまったく効かず、言動が極端に支離滅裂な者、グロテスクなまでに、痴呆的な精神生活を露呈する者」⁽⁵⁾といった、派手でわかりやすいものであり続けた。一八世紀の啓蒙思想と意識の哲学は、これらを端的に理性の欠如と位置つけたが、そこで暗黙の前提となつていたのは、「正常な精神」を（人間）理性中心に定義しようとい

う一貫した態度であり、狂気はそこから完全に一線を画する何かだった。換言すれば、例えば普段は正常者として振る舞うが、その裏で密かに狂気の特徴を有しており、時と場合によってそれが表出するといったような「隠れた狂気」のモデルはまだ影も形もなかった。また同様に、ある面では正常だがある面では異常であるといった、一九世紀以降に現れる部分的狂気のモデルもまだ存在していない。

転換期は一八世紀の末に訪れるが、この時のキーワードもやはり神経だった。フランスでは、クサヴィエ・ビシヤによる無意識的な反射動作への注目、ジョルジュ・カバニスによる人間精神への生理学的アプローチといったものが先鞭をつける。そうして、当時ようやく黎明を迎えつつあった近代精神医学の分野では、ピネルやエスキロールといった初期の巨人たちの指導下で、神経学・生理学的なアプローチと哲学・心理学的なアプローチの双方が許容されるような空気が醸成されていったのだった。この時また、一八世紀までの西欧においてどこかヒトではないものとする考えられていた狂気が——精神の疾患と捉え返されることで——その立ち位置を変化させ始めている点にも注意が必要である。一九世紀前半とは、狂気治療の方法の確立をめざして、ほぼ手探りの状況ながらあらゆる可能性が模索された時期でもあった。

フランスにピネルやエスキロールが出たのと同じ頃、

一九世紀初頭のドイツで隆盛を誇っていたのは、後にロマン派精神医学と呼ばれることになる一派である。ロマン主義は一般に、啓蒙主義と理性の哲学に対する文化的反動とも考えられてきたが、こと精神医学の分野に話を限れば、理性や意識といった概念の助けなしに正常な精神について語るのは、まだまだ困難な時代だった。

精神医ハインロートは、意識こそが人間存在を植物や動物から区別するものであると述べつつ、意識の最低段階を「子ども」や「野蛮人」の持つ世界意識 *Welt(-)bewusstsein* に見ていた。すなわち外界の環境から快感または不快を受け取るだけの、受動的で享乐的な段階である。それに続く第二段階は、悟性の目覚めと自己意識 *Selbst(-)bewusstsein* の段階である。「この自己意識があると、まるで焦点に集めるように、人間はその全存在を、身体と心とを、集結統合するのであって、この合一した、ばらばらにできない全体こそが自我 *Ich* といわれるのである。こうして人間は不可分の個人となる」。

そして、これらの延長線上に現れる意識の最高段階が良心 *Gewissen* であった。つまり道徳的な善悪の判断を司る意識であり、ハインロートはこれを、あらゆる者にその萌芽はあるものの、たいいていの者においては（所有欲や生存欲といった）利己的な自己意識に埋没してしまうものと位置づけていた。「良心、すなわち我々の自我の中のこのよ

そ者、外から我々の所へくるのでなく、(…)中からくるこのよそ者は、この我々の自我の中で警告者、忠告者、あるべきであるが世界の中にも我々の中にも今はないものを要求するものとして現れてくる。

低次から高次へと向かうこうした発達段階論的なモデルが、現代においてもある程度の説得力を持つことがあるのは、ひとえにその明快さと適用範囲の広さに負うところも大きい。ただしそれでも、ここに後のフロイトの第二局所論(エス・自我・超自我)のプロトタイプが出現しているのは確かである。ライルやイーデラーらとあわせ、この時期のドイツ・ロマン派精神医学が、プロイラー、フロイト、ユングらの理論的発見および力動精神医学の「忘れられた源泉」であるとしたエレンベルガーの見立てはおそらく正しい。ハインロートは、精神疾患の原因を道德的そして宗教的な「悪」に帰着させたことで後世の評価を大きく下げたものの、やはり精神医学に重要な遺産を遺した人物の一人であると言える。

ハインロートが好んで用いた「(不可分の)個人」Individuum という術語には、語の成り立ちからしてそれ以上は分割(divide)できない何かというニュアンスが明確に刻み込まれている。ここには人間存在の精神と身体不可分を謳いつつ、精神疾患をあくまで全人格的な病と捉えるという彼の基本的態度がよく現れている。ハインロー

トはこの語を自我 Ich および自己意識——カントの統覚 Apperzeption——と同じ意味で用いており、こうした意味で彼は啓蒙の哲学を基盤に立論を行っていた。だが他方でこの(不可分の)個人という術語には、(理性の重要性を強調するあまり、あらゆる人間を一つのカテゴリに押し込んでしまった)啓蒙主義に反発する形で、個人的なものや個別性を重視するに至ったロマン主義的な傾向も入り込んでおり、両者の奇妙な合流が起こっているように見える。

初めて「精神の医師」psychischer Arzt を名乗り、また優れた臨床家でもあったハインロートが、一人一人の患者が示すあまりにヴァリエーションに富んだ症状について意識していなかったはずはなく、したがってこの時期の精神医学に個人差のようなものへの関心が生まれるのは、どこか時代の要請であったとも言えるかもしれない。ただしこの時彼が参照したのは、気質 Temperament という古い概念だった。「要するに心情の興奮性とエネルギーが大きいものと少ないものとかが、いわゆる粘液質、多血質、胆汁質の気質などときちんと関連していることは我々は認める」。一九世紀になってなお、ヒポクラテス学派の四体液説は完全には否定されず、その影響力を残していた。これは裏返して言えば、個人差や個体差に十分な説明を与える他の統合的理論が整備されていなかったということでもある。

やや細部まで立ち入っておくと、ハインロートの学説は、この氣質による活発性の大小をベースに、第二要素として各人のエゴイズムの大小が組み合わさって、心の障害の内的要素が構成されるというものだった。以下に少し例を挙げておこう。「うぬぼれの思い上った、虚栄心の強い、自負した人間（誇大妄想症）、「子供のねじけた、たわめにくい性分」（躁暴症）、「頑丈な、がっちりした体質の人で、活発な、エネルギーシユな氣質」（全般的躁暴症）、「生れつき怖がりの、内気の、弱い心の人」（痴鈍症を伴う憂鬱症）など、ハインロートにおいては疾患の種別に応じ、罹患しやすいタイプの具体例が、前駆 *Vorläufer*（前兆）の一部として紹介されている場合がある。精神疾患をあくまで「不可分な個人」の全人格的な病と捉えていた彼にとつて、その人物が「どんな人物」かは軽視できない点であった。

三 精神病に準じる何かとしての精神病質： コッホとクレペリン

正常と狂気の間領域の問題は一九世紀を通じて、特にフランスを中心に議論される。ピネルの「せん妄なき躁病 *manie sans délire*」、それを含み込む形で提示されたエスキロールのモノマニー、さらにこれを批判する形で現れたジュール・ファルレの「理性ある狂気 *folie raisonnée*」や

「道徳的狂気 *folie morale*」等々、力点の違いはあれども、端的に言えばこれらはすべて、知性にも意志にも問題はなく、妄想も生じておらず、ただ情動面あるいは道徳面での深刻な問題を抱えていて、そうして逸脱行動に走ってしまうようなケースを扱うべく用意された概念だった。ダルモンの指摘によれば、こうした概念の乱立状況はベネディクト・モレルの変質 *dépendance* 論（1857）の登場によって収束に向かう。つまりモレルは、こうした明晰な知能を持った逸脱者たちを、精神病とまではいかなくとも確かに病的であるような存在、もつとはっきりと言えば、何かしらの遺伝的欠陥を抱えた「退化した」人々とみなしたのである。

この変質論は、進化論の流行にも支えられつつ一九世紀後半のヨーロッパを席卷した。フランスでダーウィンやスペンサーの学説が受容されるのもう少し後のことになるのだが、やや雑駁に述べるならば、過去から未来へと向かう単線の発展の尺度上にあらゆる事象を再配置してしまう進化論学説は、近代化の最中にあつた当時のヨーロッパ社会、およびその進歩主義的な時代の空気にも合致していたとも言える。

ドイツでは一九世紀の末までに、ユリウス・コッホ、パウエル・メービウスといった（モレルやロンブローゾの学説の影響を受けた）精神科医たちの手によって、あるいはマックス・ノルダウのような文筆家の手によって、フランスか

ら変質 Degeneration, Entartung 論が輸入され紹介された¹⁷⁾。

ユリウス・コッホは一八九〇年代の初めに、三巻からなる大著『精神病質低格 Die psychopathischen Minderwertigkeiten』(1891-1893)を刊行している。「精神病質」は、誰が初めて用いた表現かははっきりしないが、おそらくクラフト・エービング (1886) の『性の精神病理 Psychopathia Sexualis』以降有名になった語で、精神 psycho の病理 pathos に準ずるもの -sich (〜のようなもの、〜ティックなもの) を指していた。また「低格」とはこの場合、質的な変性・劣化を意味する語である。コッホはモレルの変質論の影響を強く受けながら、この著作の第一巻の冒頭で、精神病質低格を「遺伝性のものであれ後天性のものであれ、人の個人的生活に影響を与える心的な不規則性 Regelwidrigkeit」、つまりメンタル面のイレギュラリティと位置づけた。それは最悪の場合でも精神病には数えられないが、他方で最良の場合であっても、それによって苦しんでいる者は心身が健全であるように見えないう¹⁸⁾。

コッホはこの精神病質低格を三つのレベルに分け、軽度のもので、すなわち正常に近いものから順に素質 (Disposition: 傾向)、重荷 (Belastung: 背負っているもの)、変質 (Degeneration: 退化) と呼んだ。最も軽度の素質には少年期のホームシック傾向などが含まれ、逆に最も重度の変質はモレルの学説を踏襲したものだだったが、注目すべ

きは中間項に位置する重荷である。少し細部に立ち入って具体例を紹介しておくならば、コッホがそこで遺伝的重荷の症候として挙げていたものは、苛立ちやすさ、均衡を欠いた性格¹⁹⁾、自己中心的な考え、衝動的な考えや振る舞い、といったものであった²⁰⁾。

それからしばらくの後、ドイツではクレペリンが、メービウスの内因概念を継承しながら精神疾患の巨大な分類表を作り上げる。その時出現したのが、有名な精神病質人格 psychopathische Persönlichkeit の概念およびカテグリーであった。クレペリンが医学生向けに著した教科書『精神医学教本』においてこの概念が出現したのは、クロックによれば一九〇四年の第七版からであり、この時の下位類型は、生来性犯罪者、不安定者、虚言者と詐欺師、不満家の四つだった。集大成となった第八版(第四巻、一九一五年)ではそれが、興奮者、軽佻者、欲動者、奇矯者、虚言者と詐欺師、社会敵対者(反社会的な人格)、好争者の七つに拡大され、それらに関する記述も大幅に充実させられた²¹⁾。

興味深いのはこの時、クレペリンがコッホから精神病質の概念をそのまま継承しながらも「低格 Minderwertigkeit」という術語を用いず、代わりに「人格 Persönlichkeit」の語を選んでいる点である。上で見たように精神病質 (psychopathisch: 精神病的な) の語には、正常と異常の「あいだ」のニュアンスがあり、他方で低格の語には劣化と退化の色

彩が強く現れていた。先ほどの『精神医学教本』第七版の精神病質人格リストの冒頭に「生来性犯罪者」が挙げられていたことからわかるように、クレペリンはロンブローゾらの学説に早くから親しみ、フランスから輸入された変質論にも大きな興味を抱いていたが、他方でもとすればあらゆる病理現象を遺伝因として処理してしまいかねない極端な変質⇨退化論には、一定の距離を取っていた様子も伺い知れる。

さらに一歩踏み込んで言うならば、クレペリンがここで人格の語を採用したのは、実は少し奇妙なことでもある。なぜなら彼に直接的な影響を与えたとされる一八九〇年代のコッホもメービウスも、人格の語をほとんど用いていないからだ。全く用いないとは言わぬまでも、その使用頻度は極めて低く、彼らはむしろ（異常）性格 *Abnorme Charakter* の語を好んで用いていた。クレペリンはなぜあえて（精神病質）性格ではなく、人格の語を選んだのだろうか。

四 人格概念をめぐる：リボーとジャンネ

ここからは当時の人格概念をめぐる状況について見ていきたい。ラテン語の *persona* を起源にもつ人格の語は、一九世紀後半にはむしろフランス語圏でよく使われ

ていた痕跡がある。あまり指摘されていないことだが、コッホやクレペリンが用いた精神病質の概念がモレルの変質概念の密かな後継概念であったことは別に、人格概念もまた、一九世紀フランス精神医学と二〇世紀ドイツ精神医学との重要な接続路の一つであった。

内容面の変遷に着目してみると、DSMの「パーソナリティ障害」（旧訳では人格障害）のカテゴリーに代表されるように、今日の精神医学における人格は、主に二〇世紀以降のアメリカ心理学をベースとした、どこか性格類型の色彩を伴った概念となっている。しかし、かつての用法はこれとはかなり異なっていた。西ヨーロッパの心理学では一九世紀を通じて、人格（*Personlichkeit*、*personnalité*）は自我（*das Ich*、*le moi*）の同義語であり、つまり一八一八年のハイน์ロート同様、明晰な自己意識のことを意味していた。先述したように、カントにおける統覚は（認識の能力たる）悟性の総合と位置づけられていたし、ハイน์ロートにおける自我も、あくまで分割不可能なものとしてデザインされていた。ところが一九世紀の後半になると、この暗黙の前提に対して、不意に大きな楔が打ち込まれることになる——「二重人格」および「多重人格」の発見がそれである。

エレンベルガーによれば、西欧では一八世紀末以降に多重人格の症例報告が多く見られるようになるが、その

研究が本格化したのは一八八〇年代以降のことだった。⁽²⁵⁾一八八五年に『人格の病』を著したフランスの心理学者テオデュール・リボーは、自我が高次の心的機能であることは認めつつも、従来の形而上学的な心理学においては自我の単一性・同一性が自明視されていた点を批判して、実証主義的心理学の立場から二重人格 *double personnalité* の分析へと取り掛かる。また、後に(一九〇二年)コレージュ・ド・フランスの実験心理学講座の教授職をリボーから受け継ぐことになるピエール・ジャネも、彼の『心理学的自動症 *L'automatisme psychologique*』の第二版序文(1894)において、自我と人格をほぼ同義語として用いつつ、心理自動症現象の主要な問題として、やはり人格の分割 *division* や二重化 *dédoublment* を議論の俎上に上げていた。

このように一九世紀の末期に、自我と人格は重なり合う部分を残したまま、静かに距離を取り始めていた。例えば一人の個人 *individu* は一つの自意識(自我)を持つが、場合によって複数の人格を内部に共存させることがある、といった見方がなされるようになるのである。⁽²⁶⁾ここにおいて、カントやシャルル・ルヌヴィエ(1903)のような、時には政治的文脈とも結びつく形での人格主義(ベルソナリズム)とはまた少し位相のずれたところで、新たに心理学の人格概念が形成され始めたと言っても差し支えないだろう。リボーにおいてもジャネにおいても、自我は心的機能を統合

する上位の審級であり続けたし、人格はその同義語として用いられ続けてはいたが、他方で一八八〇年代以降には、そうした古くからの用法とは若干の齟齬をきたすような物言いも現れるようになる。

当時の心理学に人格の同一性の問題が浮上したのは、上述の点に鑑みればごく自然なことだった。リボーは同一性の概念そのものの守備範囲をやや押し拡げること、このアポリアを解消しようとする。

客観的かつ主観的に見て人格の特徴とは、時間におけるこの連続性に、また我々が同一性 *identité* と呼ぶこの永続性にある——「*この仮説は」ここで繰り返すにはあまりによく知られた理由により、有機体においては認められない。(…)あらゆる高等生物はその複雑性において単一であるというこの指摘は、少なくともヒポクラテスの書物と同じくらい古いが、ピシヤ以降この統一性 *unité* を不可解な生命原理へと帰する者は誰もいなくなった。それでもある人々は、この目まぐるしく切れ目のない分子の刷新を重く見て、いたい同一性はどこにあるのかと尋ねる。だが実際には、誰もが有機体のこの同一性を信じているし、またそれを事実として認めていたりする。同一性とは、不動であることではないのである。⁽²⁹⁾

リボーはこのように、同一性概念ひいては人格概念にしなやかな強度を付け加えてみせた。川の流れが日々同じに見えつつも、流れている水は常に入れ替わっているように、あるいはテセウスの方舟のパラドクスのように、彼はある種の新陳代謝モデルに訴えることで人格に動態的（ダイナミック）な同一性という免罪符を付与したのだった。こうなると人格は、その人物のものの見方や考え方の傾向、あるいは行動傾向といった、日々全く同一ではないにせよ、ある種の慣性の作用によって高確率で繰り返し発現する（レギュリエールな）事象を含み込む概念となっていく。

他方でピエール・ジャネはもつとはつきりと、人格の本質がその安定性にあることを指摘している。彼は（ヒステリー朦朧状態にあつて別人格を出現させる）モルジューヌ地方の憑依者たちを例に取り上げ、次のように述べる。

娘たちは悪魔のような性格を帯びていたが、いつもはそうでないことが知られており、相互に異なつた別の存在という形をとつていたことになる。ヒステリー朦朧状態は、すべてこのような現象を呈するといつてよい。（中略）

一般にこの種の発作は、短時間しか持続しない。それは、ここで出現する人格がまだ十分に完成されていない

いことを物語っている。（…）ある人たちには視覚が、また別の人たちには咽喉の運動感覚が、またある人たちには手足の運動イメージが、さらに別の人たちには飢えや渇きの感情が、欠落する。（中略）

このような不安定な構成体は遠からず解体し、正常な生を形づくつていた完成度の高い古い構成体が再び現れてくることになる。しかし、何らかの偶然のもとで多くの知的原子が出合い、より完璧で安定した構成体が形成されることも想像されよう。新しい心理学的存在の出現である。（…）多くの心理学的な原初的要素が、これまでとは別なところを中心にして結びつく。これがすべてである。³⁹⁾

一八八〇年代の終わり頃には、一人の個人の中に第二、第三の人格を宿しているケースが盛んに議論されたのだが、そこで人格は、ともすればその人物の認知および行動傾向に見られる中小規模のまとまりと一貫性のことを指すに過ぎないような、より具体性の高い分析概念の位置にまで後退している。ハインロートの時代の、抽象度の高い「（不可分な）個人」の概念からすれば隔世の感があるとも言えるが、この変化は、かつて理性の不在として大雑把に扱われていた精神病理現象に、一九世紀を通じてさまざまな角度からメスが入れられたことの結果でもあった。

やや視点を變えて言うなら、これらのことが意味するのは、フランス心理学で醸成される人格概念が、(自我やカントの統覚のような)もともとの哲学的でアプリアオリな意味合いからやや離れ、むしろその人物の行動傾向や、あるいは後天的に獲得される個別で具体的な諸性質といった、実証主義的アプローチ⁽⁹⁾によって観察可能なものとの親和性を持ち始めていたということでもあった。

五 人格概念の拡大・ダルマーニユの生物学的アプローチ

上述のような人格概念の拡大・変容の傾向は、一九世紀末期に向かつてさらに加速していくことになる。以下しばらくその様子を少し丁寧に描写してみたい。

舞台は一八九二年のベルギーに移る。この年の八月七日から一四日にかけて、第三回国際犯罪人類学会がブリュッセルのアカデミー宮殿で開催された。大会テーマは「生物学・社会学との関連における人間の犯罪性について」だった。この第三回大会は、一九一一年の第七回ケルン大会まで続けられる国際犯罪人類学会大会の、前半のハイライトとして知られている。一八八五年の第一回ローマ大会では、ロンブローゾ率いるイタリア学派が生来性犯罪者説をひっさげて登場し、犯罪人類学の成立を華々しく宣言した。と

ころが一八八九年の第二回パリ大会では、犯罪の遺伝因をあまりに強調するイタリア学派に対して、マヌヴリエやカサーニユといったフランスの犯罪人類学者たちから手厳しい批判が飛び、激しい論争を巻き起こした。この第三回ブリュッセル大会は、したがって、遺伝因(イタリア学派)と環境因(フランス学派)の全面対決の場となることが早くから予想されていたのだが、直前になってイタリア学派が全員欠席の旨を知らせてきたのだった。

大会は、予定通り八月七日に開会式を行ってスタートする。翌八日の午前のセッション——この枠は本来イタリア学派が最新の研究結果を披露するはずだった——においてまず壇上に立ったのは、当時フランスで最も有名な精神科医の一人にしてサンタンヌ学派の長、ヴァランタン・マニヤンだった。モレルの変質論から宗教色を抜き去って科学的理論へと矯正することで、一九世紀末期の変質論の再流行を生み出した人物である。フロアには、ルイ・ラダム、ポール・ガルニエ、ベネディクトといった精神科医たちが顔を揃えており、実際このブリュッセル大会は、犯罪研究そのものに対して精神医学が影響力を増していくターニングポイントになった大会でもあった。

マニヤンの「病的な犯罪衝動」に関する報告と長い討議の後、壇上には第二報告者として、ブリュッセル病院の医師にして検死部門の長、ジュール・ダルマーニユが上がつ

た。彼は当時弱冠三四歳で、おそらくは（大会主催者の一人に名を連ねていた）師ポール・クサヴィエ・エジエールに推挙されたの、イタリア学派ポイコットの穴を埋める急な登壇であったはずである。

ここでダルマーニユの略歴をごく手短かに確認しておく。一八五八年に生まれた彼は、新聞への寄稿で学費を工面しながらリエージュとブリュッセルで医学を修め、しばらく医師として働いた後に、一八九四年からブリュッセル自由大学医学部の法医学教授となる。生物学者エジエールに師事していた彼は、基本的に生物学的アプローチを取るが、社会問題に強い関心を寄せ、ロンブローゾ学説やフロイト理論にも高い関心を抱いていた。なお、後世になってエレンベルガーは、ダルマーニユを幼児期の性体験の影響について最初に指摘した人物として評価し、またドルモンは、イタリア学派とフランス学派の調停に心を砕いた人物として描いている。

さて若き日のダルマーニユは、このブリュッセルの大舞台で「犯罪の機能的病因」と題された報告を行い、自説を展開した。イタリア学派の（ステイグマに関する）解剖学的な指摘は狭量であり、もつと外界すなわち環境からの影響を考慮に入れるべきである。ときに、犯罪に至る動機の内裏には食欲、性欲、社会的欲求といった人間の欲求があるが、人体を形成するのは食物である。それが精神にも影響

を及ぼすのであり、つまるところ栄養摂取 nutritionこそが重視されるべき点なのだ——ダルマーニユのこうした物質主義的な主張は、即座にフロアからの激しい批判にさらされた。一方では人間の（道徳的）意志の力を全く考慮していないと、また他方では社会学的影響をあまりに軽視していると論難されたのである。確かに食糧の問題は、モレルの変質論 (285) でも扱われていた（犯罪研究にとってある意味では由緒正しい）主題ではあったし、またアイルランド飢饉（一八四五・一八四九、死者一〇〇万人）やロシア飢饉（一八九一・一八九二、死者三七万人）など、一九世紀のヨーロッパ社会にとって食糧危機は現実味のあるリスクだった。ただそうした点を差し引いて考えても、この時のダルマーニユの主張はややバランス感覚を欠いていた——少なくとも当時の精神科医たちの目にはそう映ったようだ。

その三年後の一八九五年に刊行された『変質者と均衡喪失者 *Dégénérés et déséquilibrés*』におおむね、彼は自説の修正版を提示している。生物学に立脚し栄養摂取を最重視するという基本的スタンスは変化していないが、学会で指摘を受けた諸点にも言及がある。とはいえここで我々が注視したいのは、彼がこの大部の著作の冒頭を、人格の話から始めている点である。

ダルマーニユによれば、人間の人格 *personnalité humaine*

は器質と環境の双方によって規定されており、そのことで犯罪人類学自体が二つの学派に分裂さえしたが、両者は相互に関連しているどころか連続性があるという。彼はそのことを、有機体 (organisme : 生命体) と環境 milieu とがお互いを変容させ合いながらパラレルに発達するという、進化論の学説を援用しながら説明していった。彼は、デカルトやカントの意識と自我の哲学を「神学的で唯心論的 spiritualiste な古い考え方」⁽³⁶⁾と退けて、ラマルクやダーウイン、そして脳局在論を引き合いに出しながら、人間精神に関する生理学的・生物学的なアプローチを推し進めようとする。ここではビネーやジャンネの夢遊病およびヒステリーに関する記述を踏まえつつ (意識のみならず) 無意識までを射程に含み込んだ、またそれをさらに越えゆくような形で、新たな人格・自我の概念が構想されていた。

人格を考えるにあたって、こうした「*ビネーやジャンネの」ただただ心理学的な方法は、我々に限定的な有用性をもたらすに過ぎない。変質者のグループはさまざまなタイプを含んでおり、それらの特徴がすべて心理学的に解釈できるわけではない。したがって我々は、人格に関する考え方を拡大したい。我々はそれを一つの心的実体とみなす代わりに一つの生物学的実体と考える。(中略)

我々が考える人格は、人間を器質的かつ機能的な一つの全体として形成させる何かである。この概念は、生命体とそれを取り巻くものの作用・反作用の吟味と、いうことに集約される。つまり人格とは、人間存在と外界のあいだの二重の適応作業の結果なのだ。言い過ぎを恐れずに述べるならば、このように理解された人格は、次の二つの見地から考察可能だろう。それが環境から受けた変化に関しては、生物学的もしくは心理学的な側面から、そしてそれが周囲を取り巻く世界に及ぼした変容について考える場合には、社会的な側面から「*人格を眺めていけばよいのである」⁽³⁷⁾。

多少荒削りな部分はあるものの、今日の精神医療を取り巻くバイオ・サイコ・ソーシャルの考え方の原型が、この時期にすでに出現している点には留意しておきたい。エンリコ・フェッリにも見られるこのような考え方は、もともととは犯罪人類学の学派間の対立から生まれた後世への果実であった。

もう一つ重要な点だが、ダルマーニユの人格概念にはかつての自我や統覚の概念と同様、人間精神に「一つの全体」を確保させる上位の心的統合機能が残されており、これと多重人格の事例とを考え合わせた際に発生する矛盾を、彼は下位人格という奇妙な補助概念の導入によって乗り越え

ていた。彼はヒステリーや暗示による人格変容について触れた直後にこう述べる。

したがって人格とは、その見かけ上の統一性にもかかわらず、下位人格の集まり *une collection de sous-personnalités* なのである。自我は代行者たちを備えており、それらは頻繁かつ目立たぬ形で日々の生活領域に割り込んでくる。我々に代わって歩き、食べ、話しているのは下位自我 *sous-moi* なのであり、その時我々の真の自我は他ごとで手がふさがっている。⁽³⁸⁾

ダルマーニユはジャネと同じく、普段は表出しない低位の人格について述べているのだが、ここで彼が（半ば無意識的に行われる）日常の何気ない所作に触れつつ、さらりと「我々」——正常な精神の持ち主——にまで話を拡張している点には注意が必要である。確かにリボーやジャネに比べれば、ダルマーニユの研究は同時代および後世の知識人たちにさほど大きなインパクトを残したとは言えないが、一九世紀末期の人格や自我の概念がこのように、世紀初頭の自我概念に比して格段にゆるやかな解釈を許すものへと変化していたことは、以上のことから十分に指摘できらるう。

六 結びに代えて…精神病質概念と人格概念の合流

本稿ではここまで、一九世紀末期までの精神病質概念および人格概念の形成と変遷について俯瞰してきた。以下では小括を兼ねて、先に提示してあった問い、すなわち一九〇四年のクレペリンが精神病質について書いた時、なぜ（低格や性格ではなく）人格の語を選んだかについて考察を試みることで本稿の結びに代えたい。まさにここが精神病質概念と人格概念との合流地点であった。

前提条件から考えていくとすれば、精神疾患の巨大な分類表を作成するにあたって、クレペリンは一九世紀を通じて議論されてきた「正常と異常の中間領域」の問題を回避することはできなかったはずである。別の角度から言えば、精神疾患の遺伝研究を試みるにあたり、当時広い関心を集めていた変質論を無視することは、ほとんど不可能だった。そうしてまず彼は、精神病質人格を（変質論のあまりの広大さと曖昧さに言及しつつ）「明白な病的状態と、まだ健全さの範囲に入る風変わりな人格の間の、広い中間領域にあるもの」と位置づける。⁽³⁹⁾これで合流の前提が整う。

精神病質の語に関してはコッホから直接継承した形跡があるが、問題は人格概念の側である。結論からすれば、我々にはこれがあつた種の消極的選択の結果ではなかつたかと考え

ている。というのは当時の性格 Character の語には、その見かけ上のニュートラル性にもかかわらず、言外にいくつものニュアンスがつきまといていたからだ。おそらくクレペリンが距離を置きたがっていたものは、一つには古い氣質論（四体液説）であり、いま一つには過度に遺伝因を強調する初期のイタリア学派犯罪人類学のような立場だった。

これまで確認してきたように、カントの『人間学』における性格論にも、ハインロートが精神疾患の前駆症状として挙げたものにも、一八世紀の氣質 Temperament 論および古風なヒポクラテス学派の影響が残っていた。これが性格の語を避けるべき理由の第一である。他方、コッホの用いた低格の語は、最初から遺伝的劣化の色彩を強く帯びていた。コッホ自身は先天的要因と後天的要因の双方に目を配りつつ、そこに（素因・重荷・変質という）三つのレベルの区分を導入したとはいえ、祖先から子孫に連なる遺伝的影響を重視する点では、やはりモレルの変質論の変奏の域を出るものではなかった。結果、ドイツに変質論を輸入したコッホが、モレルやロンブローゾを引きながら（異常）性格について述べる時、そこには必然的に遺伝性（生まれつき）の性質という色合いがにじみ出てしまっていた。これが当時この語を避けるべき第二の理由だった。

対照的に、リボーやジャンネといった一八八〇年代以降のフランス心理学が検討を重ねて再構築した人格概念は、ド

イツでは古くも新しい言わば手垢の付いていない概念だった。先天的なものの影響と、幼少期より後天的に形成され獲得されたものの混合体として、ある人物の行動傾向のまとまりをニュートラルに指し示す目的で用いるには、かえって適していたと言える。もちろん人格の概念は同時に、上位の心的統合機能（自我の同義語）という以前からの役割も担っていたが、新たな人格概念は、ジャンネに見られるように意識のみならず無意識の領域をも、またダルマーニュに最も顕著に見られるように、生物学・生理学の知見を含み込んだ実証主義的アプローチをも許容するような、柔軟な概念として作り上げられていた。⁴¹⁾

二〇世紀初頭の精神病質概念と人格概念の合流は、このようにして起こったと考えられる。ハインロートの頃のような（不可分な）個人の概念に比べ、多重人格に関する議論を経て格段に小回りの利くツールとなっていた人格概念は、例えば普段は正常者だがある場面においてのみ発作的・衝動的に異常行動を見せるようなケースをも、しっかりと受け止めるだけのキャパシティを備えていた。そうして正常と異常の中間領域の拡大および、観察記述時の自由度上昇に寄与したのである。

とはいえこのクレペリンの『精神医学教本』において、精神病質人格の名の下に、当時の新派（実証主義的）刑法学の言うところの「反社会性の高い危険者」の特徴が、「精

神疾患ではないがそれに近い存在」の特徴として展示されてしまったのは、否定しようのない事実だろう。直接的にせよ間接的にせよ、犯罪者と精神疾患患者を重ねるのは、変質論においてはモレル以降の伝統であり、その悪しき部分をクレペリンも継承してしまっていた。あるいは彼自身は慎重を期していたかもしれないが、一度著者の手を離れたテクストを同時代の読者がどう読み取るかは別の問題だった。この点に関しては、後にクルト・シュナイダーが深い嘆きを表明することになるのだが、それについてはまた別稿を期したい。

最後に本研究の今後の展望と課題について述べて、この小さな論考を閉じよう。もしも「包摂のための医療化」というものが存在するとしたら、その実践者は一九世紀前半のピネルでありエスキロールである。成否の別はさておき、彼らは（モノマニーなど）正常と異常のあいだに位置すると思しき存在を、フランス一八三八年法の適用範囲内に含ませて、監獄から病院へと引き入れるための活動に尽力した。ところが一九世紀後半以降に徐々に増加するのは、むしろ「排除のための医療化」だったように思われる。モレルもロンブローゾも、身体のみならず精神面や行動傾向の中にも危険人物の証——ステイグマー——を探し求め、それに応える形で数々の病名や診断名が発明されていった。当時の精神医学はどこかでそのための工場（ファクトリー）

の役目さえ果たしており、精神病質人格も、そのようにして産出された概念の一つだったかもしれない。

「人格の極端な偏り」としての精神病質人格は、まさに一九世紀を通じて完成に向かう近代市民社会（ひいては国民国家）から排除されるかどうかのグレーゾーン、もしくは包摂と排除のせめぎ合いのアーリーナとしてそこにあった。何をもちて異常性を指摘されるか、あるいは何をもちて正常とみなすかの基準に関しては、後に一九二三年のクルト・シュナイダーが精神病質人格を「平均からの偏差」と再定式化した時に、ようやくはっきりと示されるのだが、つまるところこの正常性とは、周囲の多数の他者たちと似たような、目立たぬ「無徴」の存在であることを意味していたと考えておいて、ひとまず差し支えないだろう。

本稿では、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての精神医学における正常と異常の中間領域の設定および拡大に際して、精神病質概念のみならず人格概念が重要な役割を果たした側面について考察してきたが、こうした流れの延長線上に、それ以降の性格類型論やパーソナリティ研究が出現することになる。このことも深く関連する個人差（個性）の問題、また正常性をめぐって現れるマニヤン以降の精神の均衡（バランス）と偏りに関する言説の変遷については、本稿では十分に論じることができなかったが、どうか今後の課題とさせていただきます。

註

- (1) Kraepelin, 1915, pp.1973-1974; 邦訳書, 1989, p.184.
- (2) Scull, 2015=2019, pp.13-17.
- (3) Keller, 2016=2017, pp.16, 35-36.
- (4) Scull, op.cit., p.177.
- (5) Scull, *ibid.*, p.8.
- (6) Heinroth, 1818=1990, p.5.
- (7) Heinroth, *ibid.*, p.9.
- (8) Ellenberger, 1970=1980, 上巻, pp.253-254.
- (9) エレンベルガーは、ハイネロートの「罪」を「罪責感」と読み替えば彼の理論が現代人に適用可能となる点についても指摘している (Ellenberger, *ibid.*, 上巻, p.251)。
- (10) Heinroth, op.cit., pp.94-95.
- (11) カントの『実用的見地における人間学』(1798年)の第二部に、個人の性格 Charakter について論じた箇所がある。そこでカントは人間の性格を、気だて (気前)、氣質 (性分)、狭義の性格 (心構え) の三つの角度から論じていたが、ここにもやはり (多血質など) 四つの氣質に関する記述が見られる (cf. Kant, 1798=2003, pp.255-266)。
- (12) Heinroth, op.cit., p.99. 他方で心の障害の外的要素として挙げられたのは、端的に言えば外界からの刺激全般だった。
- (13) Heinroth, *ibid.*, pp.202, 209, 215, 227.
- (14) Heinroth, *ibid.*, p.268.
- (15) Dannon, 1989=1992, p.152.
- (16) Dannon, *ibid.*, pp.154-155.
- (17) フランス語の変質 *dégenérescence* は「退化」の意味を併せ持つが、

- ドイツ語の変質 *Entartung* はそれに加えて「退廃」のニュアンスでも用いられた。cf. 中谷陽一 (2020) 『危険な人間の系譜』、pp.72-75。
- (18) サドマソヒズムの命名を行った有名な書物で、日本では『変態性慾心理』(1913)の邦訳タイトルで知られる。
- (19) Koch, 1891, I, p.1; Guttmann, 2011, p.210. なお英訳では「不規則性」が異常 *abnormalities* と訳されている。
- (20) 均衡を欠く (*Mangel an Ebnemaß*) とは、(ハッ)では主に心の平静さや落ち着きを欠いた情緒不安定な状態 *labiles Gleichgewicht* を意味するものの、コッホはまた空想の生活 *Phantasieleben* と現実世界 (釣り合い *Gegengewicht*) との均衡とも述べており、天秤 (バランス) のモデルが念頭にあったようだ (cf. Koch, 1891, I, p.24)。
- (21) Koch, 1891; Guttmann, 2011, p.211.
- (22) Crocq, 2013, p.151.
- (23) Kraepelin, 1915=1989, pp.190-311.
- (24) 第八版では消去 (1915)。
- (25) Ellenberger, op.cit., 上巻, p.207, note 54.
- (26) Ribot, 1921[1885], p.1, p.32.
- (27) Janet, 1894 [1889], *préface de la deuxième édition*, p.XIX.
- (28) 複数の人格が一人の個人の内部に共存している (ように見える) というのは、実際には一つの比喩であるに過ぎない。認知傾向や行動傾向、知識や記憶のストックといったものまとまりが、当時「人格」と名付けられたのである。こうしたかつての「多重人格障害」は「今日の精神医学では解離 (*dissociation*; まごまりの喪失) の概念によって再定義されている。なお解離 (*désagrégation*)

- 概念を最初に提示したのはジャンネ (1889) であった。
- (29) Ribot, 1921[1885], p.95. なお引用文中のアスタリスク(*)は引用者による補足を表している。
- (30) Janet, 1889=2013, pp.117-118.
- (31) リボーはフランスにおける実証主義的心理学の祖であり、ジャンネもまたその路線を継承した。
- (32) 一九一四年に予定されていた第八回パダベスト大会が、第一次世界大戦の勃発により中止を余儀なくされるまでの国際犯罪人類学会大会の歩みは次のようなものである。第一回ローマ(1885)、『第二回パリ(1889)』、『第三回ブリュッセル(1892)』、『第四回ジュネーヴ(1896)』、『第五回アムステルダム(1901)』、『第六回トリノ(1906)』、『第七回ケルン(1911)』。cf. Kaluszynski, 1989: 62.
- (33) cf. Coddens, 2008, pp.24-25.
- (34) cf. Ellenberger, op.cit., 上巻 p.347, 下巻 p.83; Darmon, op.cit., p.129.
- (35) *Archives de l'anthropologie criminelle et des sciences pénales*, tome7, 1892, pp.485-486.
- (36) Dallemagne, 1895, p.10.
- (37) Dallemagne, ibid., p.15.
- (38) Ibid., p.14.
- (39) 再掲。Kraepelin, 1915=1989, p.184.
- (40) ただし、人格の語には——フランス語のベルソナリテにせよドイツ語のベルゼンリッヒカイトにせよ——時にやや際立った「個性」の意味合いが付随する点にも留意が必要なのであって、クレペリンにおけるこの小さな術語の変更が、二〇世紀に入ってから動き、つまりクレッチマーやユングの性格類型論の出現や、アメリカにおけるパーソナリティ研究の隆盛にとって、

非常に象徴的な出来事だったとみなすことも可能だろう。

(41) やや補足するならば、クレペリンは精神疾患の器質因(生物学的要因)および遺伝的要因を重視する立場を取っており、そのおかげで変質論にも大きな影響を受けていたが、少なくとも精神病質人格の概念が最初に提示される一九〇四年時点において、彼が心底からそうした学説に傾倒していたようには見えない。クレペリンが変質論を論じるのは一九〇八年である (cf. Kraepelin, Zu Entartungsfrage, 1908)。

文献

- Archives de l'anthropologie criminelle et des sciences pénales*, tome7, 1892.
- Coddens, Michel, "La Belgique et la psychanalyse. Un rendez-vous manqué ?", *Le Bulletin Freudien*, n.51-52, avril 2008, pp.17-51.
- Crocq, Marc-Antoine, "Milestones in the History of Personality Disorders", *Dialogues in Clinical Neuroscience*, vol.15, No.2, 2013, pp.147-153.
- Darmon, Pierre, *Médecins et assassins à la belle époque : la médicalisation du crime*, Paris, Seuil, 1989 (鈴木秀治訳『医者と殺人者：ロンブローンと生来性犯罪者伝説』、新評論、一九九二年)。
- Ellenberger, Henri, *The Discovery of the Unconscious: The History and Evolution of Dynamic Psychiatry*, Basic Books, 1970 (木村敏・中井久夫監訳『無意識の発見』、上下巻、弘文堂、一九八〇年)。
- Heinroth, Johann Christian August, *Lehrbuch der Störungen des Seelenlebens oder der Seelenstörungen und ihrer Behandlung*, Leipzig, Wih. Vogel, 1818 (西丸四方訳『狂気の学理：ドイツ浪漫派の精神医学』、中央洋書出版部、一九九〇年)。

- Janet, Pierre, *L'automatisme psychologique*, 2e édition, Paris, Félix Alcan, 1894[1889] (松本雅彦訳『心理学的自動症』、みすず書房、二〇一三年)。
- Kaluszynski, Martine, "Les Congrès internationaux d'anthropologie criminelle (1885-1914)", In: *Mil neuf cent*, n° 7, 1989, Les congrès lieux de l'échange intellectuel 1850-1914, pp. 59-70.
- Kant, Immanuel, *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht* (Herausgeber: Oswald Külpe), in: *Kant's gesammelte Schriften*, Herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Band VIII, 1917[1798] (渋谷治美・高橋克也訳『カント全集 15 人間学』、岩波書店、二〇〇三年)。
- Keller, Pascal-Henri, *La Dépression* (Coll. « Que sais-je ? » n° 4021, PUF, Paris, 2016 (阿部又一郎・渡邊拓也訳『うつ病：回復に向けた対話』、白水社、二〇一七年)。
- Koch, Julius, *Die Psychopathischen Minderwertigkeiten*, Ravensburg, Otto Maier, 1891-1893.
- Kraepelin, Emil, *Psychiatrie: ein Lehrbuch für Studierende und Ärzte*, 8. Aufl., J.-A. Barth, 1909-1915 (遠藤みどり・稲浪正充訳『強迫神経症』、みすず書房、一九八九年)。
- 中谷陽二『危険な人間の系譜——選別と排除の思想』、弘文堂、二〇一〇年。
- Scull, Andrew, *Madness in Civilization: A Cultural History of Insanity from the Bible to Freud, from the Madhouse to Modern Medicine*, Thames and Hudson, London, 2015 (三谷武司訳『狂気：文明の中の系譜』、東洋書林、二〇一九年)。

本研究は科研費(20K02115:福祉国家以前と以後の政治テクノロジ―・仏一九世紀以降の刑罰・公教育・社会的保護)の助成を受けたものである。